

渋谷物語

2005(平成17)年3月5日鑑賞(ユウラク座)



監督＝梶間俊一／企画・原作＝安藤昇／出演＝村上弘明／南野陽子／津川雅彦／松方弘樹／風間トオル／永島敏行／榎木孝明／遠野凧子／特別出演＝安藤昇（東映ビデオ配給／2004年日本映画／122分）

……戦後復興期の昭和20年から昭和33年は、日本の高度経済成長が始まる直前の混沌とした時代。戦後60年の今、こんな時代を生きたヤクザ兼映画スター安藤昇の生きざまを考えることは大きな意味がある。純愛モノ全盛の今、『ローレライ』をはじめとする戦争モノが今年の注目。しかし同時に、一昔前に全盛を誇った東映実録モノ、ヤクザモノ映画の復活はなくとも、せめて憲法改正の議論の視点の1つとして、この映画を通して、あの「活力ある時代」をあらためて考えてみる必要があるのでは……？

「安藤昇モノ」の集大成！

安藤昇は東映が誇った『実録シリーズ』華やかなりし時代に、大いに注目されていた人物。なぜなら、菅原文太、松方弘樹、梅宮辰夫など、東映のヤクザ映画スター(?)は数あれど、現役ヤクザの映画スターなんて、安藤昇以外いなかったのだから……。戦後、特攻隊の生き残りとして復員し、昭和20年から昭和33年までの間を新宿と渋谷でヤクザとして生き抜いてきた安藤昇は、その希有な生きざまのうえに、その文才(?)と演技力(?)が相まって、映画、Vシネマ、実録モノ、自伝小説などが89本もあるとのこと。その90作目が「安藤昇モノ」の集大成ともいべき戦後60年にあたる2005(平成17)年に公開された本作だ。

とめてくれるなおっかさん 背中がのいちょうが泣いている 男東大どこへ行く

今や日本は平和そのもの……？ ヤクザの抗争も、(少なくとも)表舞台では

存在しない。ダイエーの中内功氏は既に沈没(?)し、去る3月3日には西武の総帥堤義明氏逮捕というニュースが日本中を駆けめぐり、日本の高度経済成長を支えてきた希有なヒーロー＝カリスマ経営者たちも遂に終焉を迎えた。70年安保闘争と大学解体を呼んで華々しく展開された学生運動も、1968年から69年の東大安田講堂の攻防戦をピークとして下り坂となった。その後学生運動は国民の支持を失うとともに、一部の過激派による「革命闘争」路線に移り、1970年の日航機「よど号」ハイジャック事件や1972年のあさま山荘事件へと変容していった。

1968年の東大の駒場祭のキャッチフレーズは、「とめてくれるなおっかさん 背中のいちょうが泣いている 男東大どこへ行く」というもの。これは、アウトローとしての学生運動における全共闘路線と、もともとアウトローであるヤクザ路線との融合を見事に謳ったキャッチフレーズで、当時の流行語となったものだ。しかし、そんな言葉を今どきの若者は誰も知らないだろう……？ それを知っているのは、その時代を共有した私たち団塊の世代と私たちが展開していた学生運動や全共闘運動を苦々しく見つめていた、あの当時の大人すなわち現在の60歳以上の年金受給者たちだけ……？

今年の流行は「戦争モノ」……？

今や映画は「純愛モノ」、「韓流」が大はやり。①シネコンの普及、②夫婦50割引の導入、③ホンモノ志向などのおかげで、日本映画の昨年1年間の映画興行収入は2年連続過去最高を更新し、2109億円となり、日本映画「復活」が語られている。そんな中、私が執筆した愛媛新聞平成17年3月6日付コラム「道標」における大胆予想では、今年のはやりは「戦争映画」と書き、福井晴敏原作の久々の本格的潜水艦映画『ローレライ』の鑑賞を訴えた。さてその反響は……？

「実録路線モノ」を知っているか？

現在の日本映画は、東宝の一人勝ち。その最大の要因は昨年の宮崎駿監督の『ハウルの動く城』の大ヒット。そして、そこに至るまでの『千と千尋の神隠し』や『もののけ姫』などの大ヒット。その他にも、『セカチュー』や『いま、会いにゆきます』などの日本版純愛モノの大ヒットなどによって、ここ数年は東宝映

画が大きな興行収入を「独占」している。もっともこれは、東宝が最もシネコンが充実していることもあるらしいが……。しかし1970年代の日本映画はもっと多方面で活発だった。私の独断と偏見によれば、その第1は日活ロマンポルノ路線、第2は松竹の寅さん映画、そして第3は東映の実録ヤクザ映画路線だった。その口火を切ったのは、「広島戦争」を描いた深作欣二監督の『仁義なき戦い』（73年）。

実録モノの後継者は今、『極妻』シリーズ！

今日『渋谷物語』の予告編として上映されたのが、高島礼子主演の極妻モノの最新作である『極道の妻たち 情炎』（05年）という作品。極妻シリーズは岩下志麻の主演によって製作された『極道の妻たち』（86年）が最初だが、以降何作も続いている人気シリーズで、主演も岩下志麻から高島礼子に引き継がれている。その原作は家田荘子の同名ノン・フィクション。なお大阪の、私と同じ世代の山之内幸夫弁護士が書いた『悲しきヒットマン』も人気シリーズ。このようにヤクザ映画が日本映画界に定着しているのは、やはりどこか現実社会に満足しきれない日本人には、自分がなれないアウトロー的存在としてのヤクザに対する憧れや哀愁があるのかも……。もちろんこれは、弁護士として、ヤクザの存在やヤクザの人物像を肯定するものではないが……？

この映画のテーマも戦後60年！

私がこの『渋谷物語』に大いに注目したのは、私が1999年から始めた愛媛大学法文学部での「都市法政策」の集中講義のテーマである「戦後〇〇年」という視点が明確に示されていること。この映画は、安藤昇が1945年9月東京新宿の闇市に特攻隊の生き残りとして復員してきた時から始まる。そして新宿での抗争を経て渋谷に進出し、ついに渋谷を制圧。そして「中井襲撃事件」を起こし、35日間の逃亡生活の末逮捕され、昭和33年に懲役8年の実刑を言い渡されたところで終わるもの。

1945（昭和20）年から1958（昭和33）年までの安藤昇が活躍した（？）時代の日本は、まさに戦後の混沌とした時代。そして、1956年の経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言され、高度経済成長が始まる前の戦後復興の時代。

今年4月に民事法研究会から出版される、『実務不動産法講義』は、法科大学院用の教科書として私が執筆した大著だが、これは1996年に出版した『まちづくり法実務体系』の続編としての意味も併せ持っている。これは、日本の都市法（まちづくり法）の複雑性・難解性という問題意識のもとに、その体系化を目指した本だが、その対象となる法律群は、戦後復興が終わり、国土総合開発法の制定（1950年）とそれにもとづく全国総合開発計画（全総）の策定からスタートしたもの。したがって、それ以前の時代の都市法（まちづくり法）は、「戦後復興の時代」としてひとりで説明されているにすぎない。だってその時代は、体系的な都市法（まちづくり法）など存在しなかったし、戦前から存在していた都市計画法や土地区画整理法などの都市法は完全に機能マヒとなっていたのだから……。そして同時に、戦前から存在していた大日本帝国憲法を頂点とする旧刑法や旧刑事訴訟法の体系も、1945年8月の敗戦と同時に完全にその機能がマヒし、日本国は一種の無法地帯となってしまっていたわけだ。

興味深いこの映画のパンフレット

この『渋谷物語』のパンフレットは200円と安い、その中にある、安藤昇が活躍した時代を、「そこには数えきれないドラマがあった。昭和20年～昭和33年」というタイトルでまとめた年表は、実に興味深い。まさにその年の世相を反映させる素材を紹介しているが、その「切り口」となるのが①事件、②商品、③音楽、④映画、⑤本、⑥テレビ、⑦ラジオ、⑧スポーツ、⑨演劇、⑩漫画という視点。今の20歳前後の学生諸君や法科大学院の第1期生や4月からの第2期生そして昨年司法試験に合格し今年4月から司法修習生となる第59期司法修習生諸君は、このパンフレットを読んでもほとんどわからないだろう。しかしその父親・母親である団塊の世代の人たちはそれを直接知らなくても、そのほとんどを両親から聞いたり、子供ながらに見たりで知っているはず。私たち団塊の世代がこの昭和20年から昭和33年の、両親から聞いて知っている戦後の混乱期の時代を含めたこの昭和の時代を語らなければ、他に誰も語れないはず。少なくともこのパンフレットに見事にまとめられた昭和20年から昭和33年以降の昭和の年表をつくるべき義務は、私たち団塊の世代にあると私は思うのだが……？

2人のいいオンナの登場！ その1 南野陽子

復員してきた安藤を迎えたかつての仲間たちのそばにいたのは、ピンポン屋（何とも懐かしい響きの言葉！）を営んでいた若くて美しい女、泰子（南野陽子）。安藤と泰子の2人はたちまち一目惚れ。これだけの美男と美女が登場すれば、スクリーン上では当然と思えるが、実際の恋物語（？）がどうであったのかは、もちろんわからない。またこの2人が正式に籍を入れて結婚したのか、それとも単なる同棲なのかも映画上ではよくわからない。ただ、この泰子がいい女だと思うのは、ヤクザの妻（？）としての役割と限界をしっかりと心得ていること。映画だからと割り引いたとしても、泰子がいつもキレイな格好をしているのには感心。それは店の経営者としての自覚と責任にもとづくとともに、いつ安藤が帰って来てもいいようにといつも心がけているとすればすごいもの。また、泰子の良さを最も発揮するのは、若いライバルの女（？）、奈々子（遠野風子）が登場した時。安藤に対して嫉妬して文句を言ったり、奈々子に対して悪態をついたりすることなく、「安藤を好きになったのなら、じっと耐えなければならないことがいっぱいだよ」と静かに諭すあたりは、まさに女の鑑……？ もちろんこれは、あまりにも都合のいい男の理屈だが……。

もう1人のいいオンナ 遠野風子

もう1人のいいオンナ、奈々子は女優の卵。この映画を観ている限り、安藤昇という男はヤクザながら（ヤクザだからこそ？）、女にはとことん優しいところがある。奈々子に一目惚れ（？）した後、『サマータイム』という曲が大好きと言っていた奈々子のためにセットした2人のデートの舞台はそりゃオシャレなもの……？ こりゃ、日本ヤクザ流の、オンナをモノにする手法ではなく、フランスギャング流の女の口説き方そのもの……？ しかし、こんなヤクザに惚れたら、結局は女の方が損と相場は決まっている……？ 奈々子は、自分が頼りにされていると喜んで安藤の逃亡を手助けしたが、これは刑法上明らかな犯人蔵匿罪（刑法103条）。したがって安藤が逮捕された後、きっとこの奈々子も逮捕されているはずだし、起訴猶予にはしてもらえないだろうから、執行猶予付の有罪判決をも

らって、女優としての人生の芽は摘み取られてしまったはず……。もっともそれは、彼女にとって特に不幸なことではなかったのだろうが……？

ちょっとカッコよすぎるのでは……？

安藤昇の生きザマを昭和20年から昭和33年までの間に限定して描いたこの映画の主役は村上弘明。時代劇の主役をバッチリと決めるこの俳優は、背の高さとハンサムさではあの役所広司の上をいく(?) ナイスガイ。ナマの(?) 安藤昇はこれまでも東映の映画スターとして再三スクリーン上に登場しているが、特攻隊生き残り直後という若き日の姿であっても、村上弘明はいくらなんでもカッコよすぎるのでは……？ カッコよく帽子を頭にのせ、白いダブルスーツをバッチリと着こなした安藤昇(村上弘明)の姿を見ていると、まだ小ぢんまりした勢力のボスにすぎないのに、そのカッコよさと貫禄だけはあの『ゴッドファーザー』(72年)のアル・パチーノのよう。観ている分にはこれもいいけど、ちょっとカッコよすぎるのでは……？ もっとも、昭和の時代が遠くに去った今、ラストシーンにホンモノの安藤昇が登場すると、その対比によって時代の流れの大きさに気づくという効用はあるのだが……？

『週刊20世紀シネマ館』も戦後60年の映画の集大成

今私は『週刊20世紀シネマ館』を定期購読している。その第1号は2004年1月で、毎週配本されるもの。これはそのタイトルどおり20世紀の名作(洋画)を年代ごとに1冊にまとめて紹介したものだが、その年にどんな映画(洋画)がヒットしたのか、そしてその時の日本の世相や邦画のヒット作がどうだったかなどが興味深く描かれており、まさに戦後60年の動きを映画の歴史からみることができると好企画。是非皆さんも購入して勉強してもらいたいものだ。特に団塊の世代の人たちはボチボチ定年退職となるが、そうすると暇もできるはず。そして団塊の世代の人たちはそれなりの表現能力と文章能力をもっている人が多いのでは……？ だから是非そういう団塊の世代の人たちが戦後60年を統一テーマとしてさまざまな視点から文章を書き、発表してもらいたいものだ。

2005(平成17)年3月7日記